

# 限界集落における、望ましい要保護児等支援のあり方 －北海道爾志郡 A 町を対象として－

Desirable support for an aid requiring child in marginal village

小山 貴博（函館大谷短期大学）Takahiro KOYAMA

## 1. 問題と課題

### (1) 目的

本論文の目的は、限界集落化した北海道爾志郡 A 町を対象とした、要保護世帯の見守りや支援体制の実態を明らかにすることを通して、国内における望ましい要保護世帯の支援体制のあり方について明らかにすることである。

まず日本における子どもを取り巻く日本の社会的状況を踏まえ、日本経済について考えてみると、日本は世界で GDP が 3 番目に豊かであるという。この事実は一見、経済的に豊かとみることができるものの、幸福度調査では日本は、75 位～90 位くらいに位置している。すなわち、日本社会で生きる人々は、「自分は幸福ではない」と切実に感じていると言わざるをえない。

さらに、年間の自殺者数は、毎年 3 万人を超えており、多くの日本人々は貧困状態にある。こうした諸問題は、子どもに、ダイレクトに影響を与えるのである。

### (2) 子どもの貧困

山野によれば、厚生労働省が公表している貧困状況にある子ども達の割合を占めず、「子どもの相対的貧困率」から、データを取り始めた 1985 年以来、過去最悪であると指摘する（山野,2014,p.8）。また、経済的に追い込まれている家族は、地域からも親類からも孤立しているケースが多いことも併せて述べている（山野,2014,p.10）。

子どもを取り巻く貧困において、問題点は貧困ラインを大きく下回る中で生きていることも問題である。日本の貧困ラインは親子 2 人世帯では、年間約 173 万円（月額 14 万円）、親子 4 人世帯では約 244 万円（月額 20 万）であるが、この額には、児童手当や児童扶養手当のような政府から援助されているものもすでに含まれている点に留意しなければならない。確かに、「なんとかやっていける額」かもしれないが、貧困状態に置かれた子どもや家族の所得は、この額よりも少ないのが現実である。

一番の問題は、貧困ラインから大きく下回る世帯所得の子どもが多数存在することなのである。

## 2. 貧困に関する法の理念と政策

### (1) 憲法の理念

憲法第 25 条（社会権ないし生存権）では、「日本国民は健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」とある。しかしながら、問題と課題の（2）「子どもの貧困」でみてきた通り、日本の多くの子どもを取り巻く貧困の状態は、「健康」でもなければ、「文化的」とは程遠いと言わざるを得ない。

加えて、非正規雇用のワーキングプアの問題、派遣労働者・フリーターの問題、若年層の失業率の増加、果てはこうした貧困状態におかれた人々をターゲットにした「貧困ビジネス」をはじめ、日本は先進国の中でも、特に貧困問題と常に隣り合わせにあることは否定できない。憲法の理念の実現に向けて一番大切なことは、こうした現状を踏まえたうえで、貧困状態におかれた子ども達に想いをかけることであろう。

一方で、ひとたび貧困状態に置かれてしまう状況について、山野によれば、親たちの経済的ストレスと関連し、子ども達への虐待やネグレクトの問題と直結している。そして貧困を「恥」と思う感情から、地域社会や親類間の社会関係資本を絶ってしまうこともある。さらに不十分な衣食住の問題にも繋がり、結果として子どもの発達問題にからんでくることが指摘されている（山野,2014,p.13）。

このように経済的な貧困は、個別の問題ではなく、様々な問題を併発してしまうのである。大切なことは、こうした家庭を発見し、特に子どもに対して、支援を行なっていくことである。しかしながら行政の対策は、予防策という点においても、また予後においても十分とはいえない。まずは、こうした家庭を発見した場合において、地域の大人が「どのように」関わるのか、という点が一番大切であろう。第 3 節以降から、日本の限界集落化した北海道の A 町を対象として、貧困状態に置かれた子どもに対して行われている地域の見守りについてみていくこととする。限界集落化した A 町は、“超”少子高齢化の問題に加え、生産人口の減少という危機的な現実を迎えており、A 町の実態について理解することは、貧困問題が直撃している家庭に対して、地域社会でどのような、子育て支援が行われているのか、大都市圏における、子育て支援のあり方について、検討および改善策を考える際に、示唆に富むと考えられる。

## 3. 地域社会における子どもの見守り

### (1) 北海道爾志郡 A 町概要

A 町は、北海道道南地区に位置する渡島半島西岸にあり、西側は日本海に面し、東側は山間部に囲まれている。また、北側は八雲町、南側は厚沢部町に面しており、道南地区における中核都市である函館市にも、自動車で 2 時間弱程度で行き来ができる。町域全体の 81% が山林であり、人口は海岸部に集中している。基幹産業は、漁業と農業であり、二次産業として、水産加工業がある。

続いて、A 町を取り巻く人口問題について取り上げたい。高度経済成長期には人口総数は 1 万人ほどの規模であったが、それから約 50 年の年月を経て、現在は 3,925 人である。

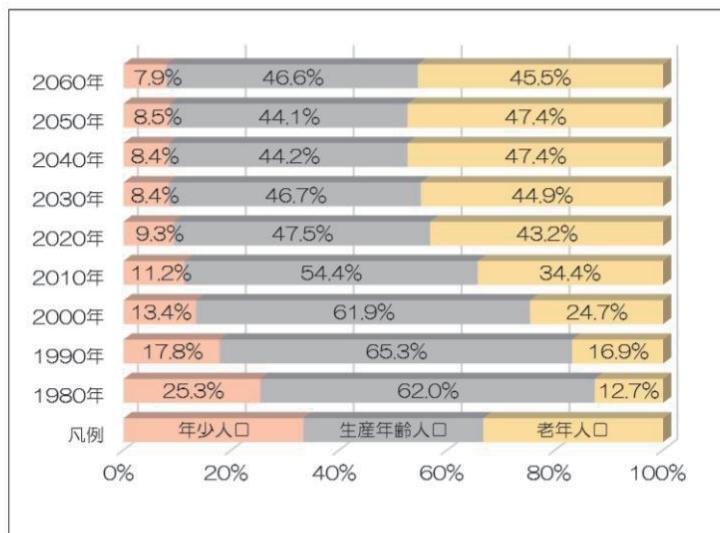


※ 2010 年までの総人口は国勢調査より作成

※ 2015 年以降は社人研推計値より作成

図 1.A 町の年齢 3 区分別人口の推移 (A 町人口ビジョンより)

また図 1 より、2015 年現在、生産人口が老人人口を若干上回る程度であり、さらに年少人口は 1,000 人を大幅に切っていることが窺える。また A 町における公立小中学校就学人口は、228 名である。すなわち A 町における義務教育段階での就学人口は、A 町の総人口の 5.8% であり、少子高齢化の問題に直面している地域であるといえる。



※ 2010 年までの総人口は国勢調査より作成

※ 2020 年以降は社人研推計値より作成

図 2. A 町の年齢 3 区分別人口比率の推移 (A 町人口ビジョンより)

そして、生産年齢人口について、図2を手がかりにみていくと、来る2020年には50%を切るとみられている。一方で、老人人口 40% を超えており、少子高齢化の問題のみならず、A町における基幹産業を支える層の減少すなわち、「過疎化」と「限界集落化」問題はもはや、火を見るよりも明らかと言わざるをえない。

しかしながら、こうした状況の中でも、子どもは存在する。A町において、子ども達はどのように生活をしているのだろうか。下記インタビューをみていくと、そこには、貧困問題と隣り合わせの日本の中でも、地方都市が抱える問題を一手に引き受けているような現実がある。

## (2) A町における子どもを取り巻く現状と課題 ーインタビュー調査を中心にしてー

これまで、A町における地理的状況と人口問題についてみてきた。これによって、A町が過疎化の状態にあり、限界集落に陥っていることが見受けられた。その中でも少子化は顕著である。それでは、A町における子どもを取り巻く状況はどのようなものなのか。筆者は、2019年5月にA町にて子どもの見守り活動をボランティアで行なっている方にインタビュー調査を行なった。このインタビューから窺えるのは、A町の子どもを取り巻く、貧困問題をはじめとした、様々な困難な現状である。今回のインタビューはその中でも、早急に行政支援および社会的支援が求められる子ども（以下、X君とする）についてふれられていた。

（X君のおばあさんによると）X君のうちも母子家庭になっていて、その当時は、（X君のお母さんは）結婚していて、旦那さんもいたんだけど。おばあちゃんの家庭も、娘（X君のお母さん）の家庭も生活保護を受けていて、大人にあこがれるんでしょうかね。僕のところに遊びに来たいと言い出したんです。

まずX君を取り巻く状況を指摘したい。X君は祖父母の代から生活保護世帯であるということ。このことから、X君は、ギリギリのラインのところで生活をしているということが理解できる。すなわち、貧困状態と常に隣り合わせの生活をX君は送っているといえる。そうした中で、X君に関する話題は、高校進学へと移っていく。

ちょうど、高校進学の時期だったので、「どうするの？」と聞いたら、普通の人は（地元の） $\alpha$ 高校にいくんですけど、 $\beta$ 高校だと。なんで $\beta$ 高校なのと聞くと、「僕は、あまり大人数のいる学校は嫌だ」と。「 $\alpha$ 高校だといじめがあるの？」と聞くと、黙ってしまったんですけども・・・（中略）・・・ $\beta$ 高校に行くのに、公共のバスでは まっすぐ行けないんですよ・・・（中略）・・・

それも結構たいへんなんですよ。（途中の）道立病院で、1時間待って、それでバスにのって、やっと着くんですね・・・（中略）・・・（X君には）「高校でも、一生懸命やれ今までいわないけど、最低限、赤点は取らないとか、とにかく高校は卒業しろ」と。「学歴社会じゃないけど、今は、やはり中学を卒業して仕事をするには、ハンデキャップがあるから、高校はどこでもいいから卒業しろ」と言ったんですよ。

このように、X君は、第三者である地域の大人から高校進学をどのように考えているか聞かれ、「 $\beta$ 高校に行く」と決意を表明している。また、最低限でいいから勉強をすること、高等学校の卒業を目指すこと、この2点をアドバイスとして受けている。そして、高等学校生活を送る中で、今後のキャリアを見据えたアドバイスも受けようになる。

僕と話していた時は、「電気工事士になりたい」と。でも、電気工事士はうちの実家がしていたので、「給料も安く大変だぞ」と。「でもやりたいなら、電気工事士の二種を取りなさい」と。それで、過去問題とテキストを買ってあげて、「わからなかつたらおじさんのところに来て」と。あとは、自信をつけさせるために、危険物取扱者免許の資格（乙）かな、受ける準備をしていたんですけど、なかなか身につかないのですよ。心配はしていたのですけど。まあ、ちょっと勉強したらこれも合格できるので、在学中にライセンスを取ってもらって、自信と、あと就職も有利にはたらくし、あとは早く自立をしなさいと。「困ったことがあったら、相談にきなさい」と話をしていたんですよ。よくうちにも来していましたけど。

X 君は危険物取扱者および電気工事士の資格取得という目標を見つける。そして過去問題集とテキストを得て、わからないところは質問するようにアドバイスを受けている。これは、インタビューイーが、X 君に資格取得という成功体験から「自信を持って欲しい」ということが願いとして込められており、自立を促されている。しかしながら、X 君にとって、この目標はハードルが高いという現実と直面することとなる。

ただやっぱり、これまで（小さい時から）本を読んだりってことをやっていなかったみたいで。「読んだのか」って言つたら、あまりいい返事をしなかったので、勉強の方も危険物の試験が 7 月だったので、「じゃあ危険物は来年の 7 月にまわそうか」と。でも電気が 10 月だったから、「それに向かってやりなよ」と。でも具体的な動きがなくて。結局受ける時に 6000 円（受験料）とかかかるじゃないですか。だから、親に言えないのかなと。そしたら、アルバイトしようと。農家の仕事をすればいいし、高校生はアルバイトが可能なのですから。自ら得たお金でやるというのは親も賛成するだろうし。でも、具体的な動きがない。だから、この子をどのようにもつていいたらよいか、悩んでいたんですよね。

ここから窺えることは、これまで基本的な学習習慣を身につける機会に恵まれなかつたため、「いい返事をしなかった」という点である。また、X 君自身途方にくれたことが推察される。そして、具体的に受験の時期について、アドバイスを受けたものの、結局動き出すことは無かつた。この時ネックの 1 つとなつたのは、受験料の 6,000 円という金額である。こうしたことから、これまで X 君は貧困状態に置かれたことによって、金銭問題が生じた際に、物事に挑戦できる可能性が無いと判断を下さざるを得ない状況に陥ってしまうことが指摘できる。そして、X 君を支援してきた大人にとっては、「この子をどのようにもつていいたらよいか、悩んでいた」という葛藤の中にある。X 君に対する希望を失っている訳ではないものの、X 君を取り巻く状況は益々厳しいものとなる。

複雑な家庭環境、おばあちゃんもそうだし、X 君の家もそうだし、生活保護を受けているし、教育環境として、あまりよくないのではないかと。いじめとか学校であつていたと想像できますね。なるべく、っていうか、僕らにとっては、そういう子どもなので、はやく自立をさせたいと思っていて。

家庭環境ももちろん複雑というか、厳しい環境にあるものだから、自分の意思でこうしたい、やらなきゃいけないと思い切ることができないというか・・（中略）・・・だからアプローチとしては、今となつてはね、高校辞めた時に「辞めたって聞いたけど本当か」と。X 君からは（「今後の人生が）厳しいのはわかっています」と（返事が）かえっていて。僕らができるアプローチはそれくらいかな。そう思いますね。その時々に、「本当にこれでいいのか、本当に我々ができることがこれだけしかないのか」と。

当初は、複雑な家庭環境や貧困状態にあっても、X君本人の努力と地域の大人的支援によって、自立が目指されていた。しかし、X君はβ高校を中退していたことを、周りの大人は知ることとなる。この時、X君は、「辞めたって聞いたけど本当か」と声をかけられている。そして「本当に我々ができることはこれだけしかないのか」と周りの大人は、自問自答を繰り返している。ここから窺えることは、X君は、現状では地域社会から完全に孤立していないものの、高等学校の中退を契機に、自ら少しずつ地域社会との接点を絶ってしまうという現実である。これはインタビューによる「僕らができるアプローチはそれくらいかな」という発言からも垣間見える。これは、親子3世代にわたって生活保護を受給している点から、貧困状態に端を発していることが分かる。逆にいえば、地域社会を取り巻く大人達が「気にかける」ことによって、かろうじてX君は生きながらえているともいえる。

#### 4. 要保護児等の家庭に対する、望ましい支援のあり方

以上、北海道爾志郡A町の事例から、要保護児の実態についてみてきた。X君の事例から、貧困の状況によって、基本的な生活習慣を身につける機会が困難であり、それが学習習慣にも表れていることが窺える。そして、高等学校を中途退学し、学校すなわち教育とのつながりが遮断されたことのみならず、「高校中退」という烙印は、本人にとっても相当精神的に追い込んでいるのであろう、体裁が悪いが故に、またこれまで支援してくれた地元の大人達に対する、後ろめたさから、地域との関わりも自ら遮断しようとしている。

一方で、周りの大人は「僕らができるアプローチはそれくらいかな」と思うものの、「本当にこれでいいのか、本当に我々ができることがこれだけしかないのか」という葛藤の中にある。

すなわちX君の“存在”は、1) 地域の結びつき 2) 地域の大人にによって目をかけられること 3) X君をどうにか自立させたいという周りの大人の強い想い 4) それでもX君が交わした約束を、無情にも反故にしたり、貫徹できない弱さから、どう接したら良いかと困惑する大人達 こうした相矛盾した気持ちを抱えた、大人達のX君に対する関心によって、かろうじて支えられているといつても過言では無い。

反対に、X君に代表される要保護児およびその家庭は、社会から「無関心」な存在として扱われた時に、その存在も危ういものとなる。要保護児に対して、そしてその家庭に想いをかけることが、望ましい支援を考える第一歩となりうると筆者は信じてやまない。

#### 【引用・参考文献】

森岡清美編著『家族社会学』有斐閣、1967年

吉田眞理『保育相談援助』青踏社、2015年

山野良一『子どもに貧困を押し付ける国・日本』光文社新書、2014年

<sup>1</sup> A町教育委員会のインタビュー（2019年4月29日）

<sup>2</sup> 蟹名幸弘氏。北海道の中核都市にて、大手通信会社に勤務。定年退職後は、第2の人生として、蟹名氏の生まれ故郷にほど近い、A町に一軒家を建て、居住することを選択する。普段は、自宅近くの畠を中心とした、農作業に従事する傍ら、地域の独居高齢者の見守りをボランティアで行っている。また蟹名氏の奥様は民生委員を務める。

<sup>3</sup> 蟹名幸弘氏のインタビュー（2019年5月10日）

<sup>4</sup> これは、3年前である2016年の頃である。この時、X君は中学校2年生であった。

<sup>5</sup> 蛭名幸弘氏のインタビュー（2019年5月10日）

<sup>6</sup> 蛭名幸弘氏のインタビュー（2019年5月10日）

<sup>7</sup> 蛭名幸弘氏のインタビュー（2019年5月10日）

<sup>8</sup> 蛭名幸弘氏のインタビュー（2019年5月10日）

<sup>9</sup> 高校2年次進級の直前に、中途退学。

<sup>10</sup> 蛭名幸弘氏のインタビュー（2019年5月10日）

### ＜謝辞＞

本論文の執筆にあたり、インタビューに全面的にご支援頂いた、蛭名幸弘さんと奥様でいらっしゃる蛭名憲子さんに、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。